

浅間道春 ひとり芝居

Michiharu Asama one man show

作・監修：高谷信之

2023.10.15(日) 17:30 開場 18:00 開演

「一草庵」前庭・特設ステージ

※小雨決行。大雨の場合は10月21日(土)に順延

五十七年の生涯^{たび}。

流浪する己に、

種田山頭火は何を見たのか。

風 吹に か れ て 山 頭 火

SANTOUKA Blowing
in the Wind



《料金》1,000 円 (観劇特別パンフレット代)

《チケット予約》089-933-7373

(松山市シルバー人材センター)

※チケット予約開始日 9月19日(火)

《雨の場合・問合せ》080-6383-7913

(『風に吹かれて山頭火』を上演する会)

※駐車場はありません。公共交通機関でのご来場を極力お願い致します。
<最寄駅>市内電車・環状線「赤十字病院前」→徒歩7分

『風に吹かれて山頭火』を上演する会・公益社団法人松山市シルバー人材センター
特別協賛 / NPO 法人まつやま山頭火倶楽部

—この公演はまつやま山頭火倶楽部が主催する「秋の山頭火まつり」の一環として行われます—

浅間道春ひとり芝居『風に吹かれて山頭火』のご案内

『風に吹かれて山頭火』を上演する会
(大平裕之・兵頭啓一・浅間道春)

企画概要

松山市シルバー人材センター（以下、松山 SC）会員の浅間道春が、古希を迎える 2023 年秋にひとり芝居の公演を行います。テーマは松山と縁の深い、自由律俳句の巨人・種田山頭火。東京で役者として活躍した浅間が、18 歳で衝撃的な出会いをした山頭火に捧げる、一種の“オマージュ劇”です。公演場所は、山頭火と松山を語る上では欠かせない聖地、山頭火の終の住処となった「一草庵」前庭の特設ステージとなっています。

この芝居を一からプロデュースして応援しているのが、同じ松山 SC 会員の 2 人です。ともに 60 歳を過ぎて東京から松山市に移住した 3 人が、松山 SC で出会い、上演する会を結成しました。チラシ、パンフレットのデザイン・制作から、プロモーション、会場設営・運営に至るまで、すべて上演する会が手掛けています。また、松山 SC では、浅間を講師とするドラマ・リーディング講座を企画。今年 4 月から隔週で開催して、芝居を通じた松山 SC の新たな活性化にも協力しています。

新しい人生のスタートをともに松山で切り、松山 SC がなければ出会わなかった 3 人が、ユニークな試みにチャレンジしています。応援していただければ幸いです。

実施概要 浅間道春ひとり芝居『風に吹かれて山頭火』

《公演日時》 **2023 年 10 月 15 日（日曜日） 17:30 開場 18:00 開演**（上演時間 50 分）

※小雨決行。雨天の場合は、10 月 21 日（土曜日）18 時～に順延予定

《公演場所》 **一草庵・前庭特設ステージ** 松山市御幸 1-435-1

《出演》 **浅間道春** / 松山 SC・リーディング倶楽部有志（山頭火の句を集団で唱える黒子的存在）

あさま みちはる 学生時代から役者として活躍する傍ら、30 代からは東京・高円寺にある小劇場「明石スタジオ」の支配人を務める。四年前に松山へ移住。18 歳で山頭火と出会い、その足跡をたどる、九州から四国に至る 3 カ月の“放浪”旅も経験した。それから 50 年を経て、古希を迎える今年、山頭火への尽きぬ想いをこの芝居に込め、集大成とする。

《作・監修》 **高谷信之**

たかや のぶゆき 劇団を主催する傍ら多くのテレビ・ラジオドラマの放送作家として活躍。代表作に『風・ふたり』（NHK テレビ/1993 年）、『枝の上の白色レグホン』（文化庁芸術祭大賞ラジオ部門大賞/NHK 1996 年）、『下町ロケット』（池井戸潤作・高谷信之脚色/TBS ラジオ 2014 年）、『染井吉野にピンクのリボン』（NHK ラジオ・FM シアター 2022 年）など。

※本作の制作を担当する「上演する会」の大平は、長年 NHK のニュースバラエティやクイズ番組の構成・リサーチを担当する一方、映画やイベントのプロデュースも手掛けてきました。

《観客数》 **90 名**

《料金》 **1,000 円**（観劇特別パンフレット代）

《チケット予約》 **TEL 089-933-7373**（松山市シルバー人材センター） ※2023 年 9 月 19 日より

《共催・協力》 **公益社団法人松山市シルバー人材センター**

《特別協賛》 **NPO 法人まつやま山頭火倶楽部**

※この公演はまつやま山頭火倶楽部が主催する「秋の山頭火まつり」の一環として上演されます。

《問合せ先》『風に吹かれて山頭火』を上演する会・大平裕之

（電話）080-6383-7913 （メール）MHF03164@nifty.ne.jp

山頭火病と芝居熱。 「能もなき“役者”とならんあら涼し」

浅間道春



遙か昔、生意気盛りで世間知らずの若造が魅入られたのは、『つまずいたら転んでいたいのである』と詠んだ貧乏詩人や、『つまずく石でもあれば私は転びたい』と詠んで餓死した詩人。あるいは身一つで放浪をかさねた俳人の生き様死に様に、己れの生き方はまさにここにあるのだと、負のベクトル一直線で、つまずいては転んでフラフラと歩きつづけた50年後の姿で、私はいま、舞台上に立とうとしている。

振り返れば、重篤の「山頭火病」に罹り、ついには後先考えずにその足跡をたどって、山口、福岡、熊本、そして愛媛と3カ月の擬似放浪をしたのもハタチの頃だった。その旅の終わりに、山頭火研究の第一人者・大山澄太翁に連絡も取らずに図々しく押しかけたのにも拘らず、翁は慈愛の眼差しで、丁寧に生前の山頭火話のアレコレを飄々として語られたのが思い出される。

この冒険の旅で病は癒えたかと思いきや、次に罹ったのはタチの悪い「芝居熱」だった。それこそ学生演劇から始まり、得体の知れぬアングラ芝居、シェークスピア等の翻訳劇、寺山

修司や難解な歴史劇、果ては商業演劇まで、ダボハゼの如く節操もみさかいてもなく病はアチコチ転移したのだった。

忘れてはならないのは、この戯曲を書いてくれた高谷氏の芝居にも3本出演したのであるが、これは決してダボハゼではないことをここで断っておく。高谷氏の芝居にたいする情熱はハンパではなく、今回も自費で東京から松山まで出向き、監修をしてくれたのである（おんぶにだっこで、ごもすみません）。

思い返すと不治の病に罹って50年、なんだか終わらない夏休みが今も続いているような、いやこれからも続くような・・・、イヤハヤ呑気な人生であります。

さて松山に移住して4年。何処にも足を向けて寝られぬ中、今宵かぎりのひとり芝居、燻り続けた芝居と山頭火への想いのだけが皆様のお目にかないますやら。

最後は、漱石先生に倣い一句。

「能もなき“役者”とならんあら涼し」
お粗末様でした——。